

療育施設を利用している保護者における子どもの障がい受容過程に関する研究
—子育ての幸福感に着目して—

福祉心理学専攻 三浦 朋樹

本研究は、児童発達支援・放課後等デイサービスを継続的に利用する保護者を対象として、子どもの障がい理解および障がい受容の心理的過程、さらに子育てにおける幸福感の変容を質的に検討することを目的とした。

近年、発達障がい・知的障がい児への早期支援が進む一方で、保護者が障がいをどのように理解し受け止めていくのか、また療育施設との関わりが保護者の心理的適応にどのような影響を及ぼすのかについては十分に明らかにされていない。既存研究では、段階モデル、慢性的悲哀モデル、螺旋モデルなどが提示され、受容が揺れを伴う動的過程であることが示されている。

また、発達障がい児の保護者には特有の認識の揺れが存在し、受容の程度は育児ストレスや育児満足感と密接に関連することが報告されている。さらに、ソーシャルサポートや情緒的支援、地域資源とのつながりといった社会的要因が、受容と育児幸福感の双方に影響を及ぼすことが指摘されている。本研究は、こうした背景を踏まえ、療育施設を利用する保護者の受容過程と幸福感の変容を明らかにすることを目的とした。

調査は児童発達支援・放課後等デイサービスを継続利用している保護者を対象に調査を実施した。まず、質問紙を用いて利用開始時から現在までの幸福感の変化を回答してもらった。その後、半構造化インタビューを実施し、受容の揺れや成長実感、療育施設との関わりなどを語ってもらった。インタビュー内容は同意を得て録音し、逐語録を作成した。

分析の結果、保護者の障がい受容はショック、否認、自責感といった感情の揺れを伴いながら進む動的プロセスであることが示された。また、子どもの成長実感は育児幸福感を高める重要な要因であり、受容の揺れを支える中心的な心理的資源として機能していた。さらに、療育施設は子どもの発達支援を通じた間接的支援と、保護者への直接的支援という二つのルートから、保護者の心理的適応を多面的に支えていることが明らかとなった。専門職による伴走的支援や家庭との協働は、保護者の安心感や見通しの獲得に寄与し、受容と幸福感の向上に影響していた。

本研究は、保護者の障がい受容が固定的な段階ではなく揺れを伴う動的過程であること、そしてその揺れが子どもの成長実感や療育施設からの支援によって支えられていることを示した。特に、成長実感は育児幸福感を高めるだけでなく、受容の揺れを乗り越えるための心理的基盤として重要であった。また、療育施設は保護者の心理的適応を支える重要な拠点として機能しており、専門職による継続的な関わりが受容と幸福感の向上に寄与する可能性が高い。本研究は、保護者の障がい理解・受容を促進し、育児幸福感を高めるための支援方略および療育施設の実践的機能に関する知見を提供するものである。